Recommended Trip NO・TABI

「戸定が丘歴史公園」内の松雲亭の縁側にて

昭武とコーヒーの出会いが私たちと松戸の出会いをつくってくれました。

徳川昭武とコーヒー ～松戸市と山梨県を結ぶ縁～

徳川昭武は、最後の将軍・徳川慶喜の実弟である。

次期将軍候補として期待されていた昭武は、1867年に将軍・慶喜の名代としてパリ万博に派遣された。この時、彼はまだ13歳でありながら、宮廷外交の最前線に立ち、ナポレオン3世をはじめ各国の元首と交流。イギリスの新聞は「プリンストクガワ」と報じた。

昭武の渡欧には、後に「日本資本主義の父」と称されるようになる渋沢栄一をはじめとする20名ほどのエリートが随行した。この使節団には、山梨県にゆかりのあるメンバーもいた。昭武の傅役に任じられた山高信離は、甲斐・武田氏と同族の源氏の名門山高家の養子となり、同家の当主となった人物である。樹齢2000年とも言われる山高神代桜が有名な山梨県北杜市の実相寺は、信離の先祖の居館跡に建てられたものだ。もう1人、杉浦譲は甲斐国山梨郡府中（現山梨県甲府市）の出身で、後に郵政事業創設に携わったことで知られる人物である。

昭武がコーヒーに出会ったのはこの渡欧のとき。パリへ向かう船中やシェルブールの海岸で、渋沢栄一らとともにコーヒーを楽しんだ。昭武は、仏文日記にモカ（現在のイエメン国内）がコーヒーの名産地だと書いている。

日本は明治維新による時代の転換期を迎え、昭武は将軍になることなく、華やかな表舞台から去っていった。しかし、彼が渡欧で培った豊かな感性は、その後も輝きを失うことはなかった。松戸には、そんな昭武の知られざる歴史のロマンがある。

歴史を五感と結び付け共有することは文化を守ることにつながると考え、松戸市観光協会では「プリンス徳川プロジェクト」を始動した。

イエメン産モカをフレンチローストして当時のコーヒーを再現した「プリンス徳川カフェ」。これを活かした新しい名産品が生まれている。

そのおいしさと出会う「の、たび」。そして、昭武の和と洋を調和させた美意識を、徳川家の遺風を伝える戸定邸&庭園を訪ねる「建築探訪エッセイ」。

松戸の魅力を、五感で楽しんでみませんか？